

c. 自然科学分析

中街道遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

愛知県岩倉市に所在する中街道遺跡では、下層から古墳時代～中世（鎌倉・室町時代）の竪穴住居跡、溝、土坑、柱穴、井戸等の遺構が検出されている。

本報告では、井戸から出土した木製品の樹種を確認するための樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、井戸 SE1 から出土した斎串（No. 246）と桝の腕木（No. 301）の 2 点である。

2. 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

3. 結果

木製品は、2 点とも針葉樹のヒノキに同定された（表 1）。ヒノキの解剖学的特徴等を記す。

表 1 樹種同定結果

番号	層位	グリッド	遺構	遺構内層位	器種	木取り	種類
No. 246	下層		SE1	下層（黒色質土）	斎串	柾目	ヒノキ
No. 301	下層	C13	SE1	5 層（最下層）	桝（腕木）	削出	ヒノキ

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

4. 考察

木製品は、いずれもヒノキに同定された。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、分割・切削等の加工は容易である。

斎串は、長さ約 70 cm の薄い柾目板状を呈し、一方の端部は破損している。割裂性が高く、分割加工が容易なヒノキの材質を利用したことが推定される。

桝の腕木は、削出棒状を呈し、支え木を差し込むホゾが広い面は柾目となる。桝の差込式腕木については、支え木との接続部の形態から 4 形態に分類されており（東村, 2011）、本資料は弥生時代中期後半の青谷上寺地遺跡を初現とし、古墳時代以降は主流となる Y 型に分類される。本地域では、同時期の腕

木について樹種を明らかにした例がほとんど無いが、同様の資料では全国的にスギ、ヒノキ、サワラ等の針葉樹の利用が顕著であり（伊東・山田,2012）、今回の結果も調和的である。これらの結果から、腕木では、材の強度よりも加工性を重視した木材利用が推定される。

引用文献

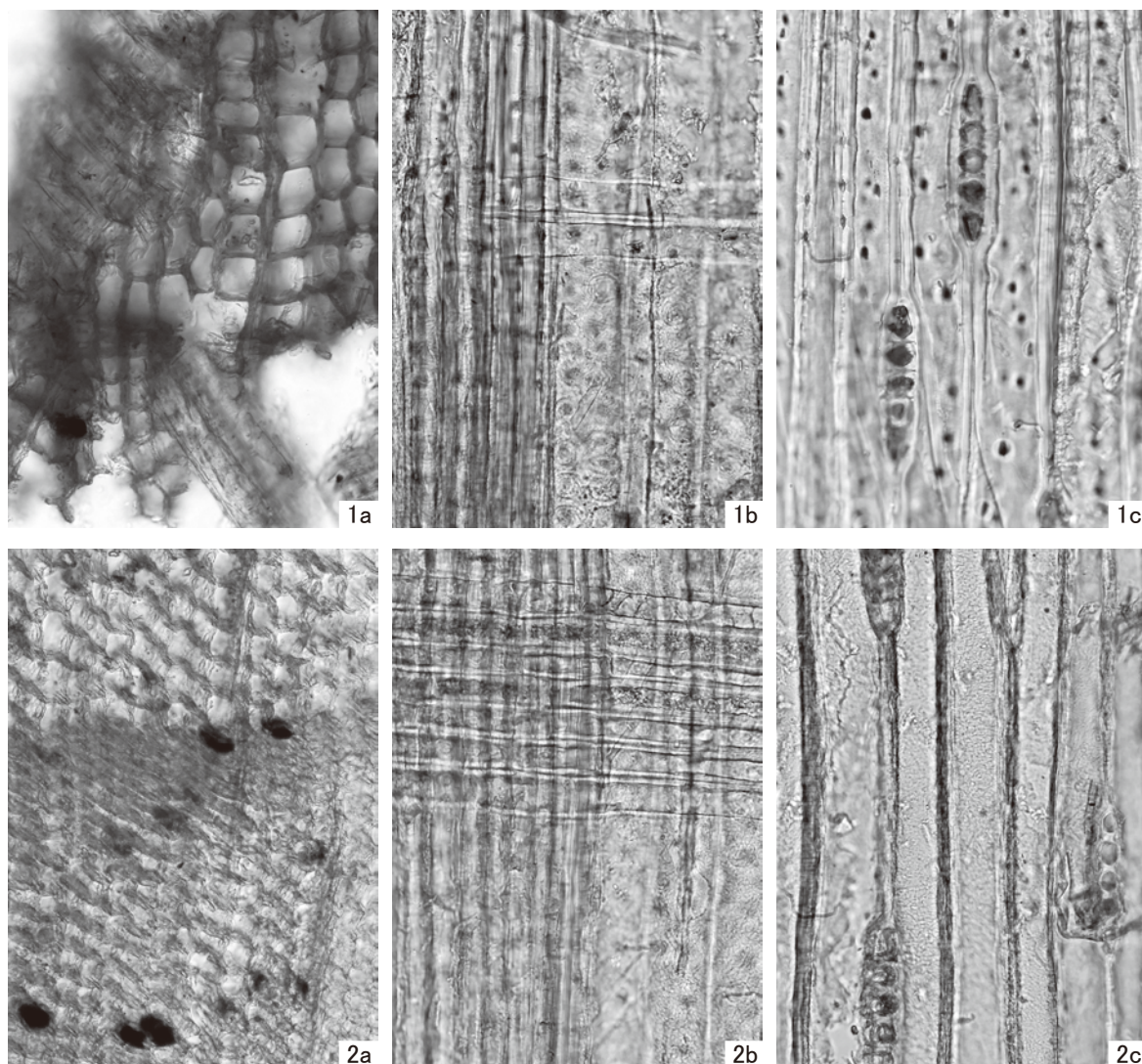
東村純子,2011, 考古学からみた古代日本の紡織. 六一書房,205p.

伊東隆夫・山田昌久(編),2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社,70p.
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地謙・伊東隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.

図版1 木材



1.ヒノキ(No.246)

2.ヒノキ(No.301)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m:a

100 μ m:b,c

4. 総括

(1) 中街道遺跡の時代別遺構の変遷について

中街道遺跡では本発掘調査の結果、古墳時代から近世までと長い時を通して、その時代の人々の営みが連綿と続いていた事がわかった。その証に本遺跡の周辺には西に 300 m ほどの位置で、尾張地域では珍しい方墳の西出古墳が見られ、円筒埴輪や須恵器など古墳時代中期の遺物が多量に出土した。また北北西 300 m の位置では、白鳳期の寺院跡である御土井廃寺などが近接して見られている。また、遺跡の西側には、岩倉街道が現在も日々の生活に密着した形で存在し、往時の姿を忍ばせている。

その様な歴史的環境の中で、どのような事が中街道遺跡では見えたのか、ここでは時代を追って見ていきたいと思う。

弥生時代終末期～古墳時代前期

この時代（廻間Ⅰ～Ⅲ式頃）は比較的、遺物量は定量見られるものの、遺構に伴うものは少ない。遺構数も少ないが、竪穴建物 2 軒など生活空間としての建物も見られ、ほかに土坑、ピットといったものが、散発的ではあったが確認できた。集落の広がりには竪穴建物が南側調査区域外へ広がり、調査区の大部分が、新しい時代の遺構である SX2 によって多くの遺構が広範囲に切られていることから推察するに、南側へ集落の主体が展開している可能性が考えられる。

古墳時代中～後期

この時代も遺物は包含層や他遺構との混入遺物として見られるものの、遺構数は極端に少ない。

古代（白鳳期～平安時代）

この時期の遺構は竪穴建物や井戸などを中心に、調査区の東側を主に展開する。竪穴建物は比較的北東－南西方向に向く傾向にあり、ほぼ同時期の井戸もまた平面形が良く似た軸方位で見られることから、竪穴建物や井戸の立地していた時代、7 世紀後葉～8 世紀前葉の頃は、集落としての主軸はやや北東に振る形であったと考えられる。竪穴建物や井戸の周辺には、灰や焼土などが充填されていた土坑（SK25 や SK26）なども見られ、火処（竈など）で出た灰などを掃除した時の処理先として、ゴミ穴を作り、生活の空間の一角に配置していた事が読みとれた。また SE2 の配置状況から、この時期の集落は南東側への広がりも見られる事がわかった。8 世紀前葉以降の状況は、数基の土坑が見られたのみで判然としないが、11 世紀初頭（H-72 段階）となって調査区北西側で若干遺物が集中して包含層や遺構から出土している。調査区東側では、この時代の遺物がほとんど見られないことから、遺構の中心が西側へ移動している可能性も考えられる結果であった。

中世、近世（平安時代末～江戸時代）

本遺跡での、この時期の主要な遺構は、SX2、SD7 や掘立柱建物（SB1、2）、大型土坑（SK77）などで、ほかに北東－南西、北西－南東方向の小溝、小区画溝、土坑などが見られている。

時期は出土遺物から大きく4 時期ほどに分かれる。Ⅰ期 12 世紀後葉～13 世紀前葉頃（4、5 型式頃）Ⅱ期 13 世紀後葉～14 世紀中葉頃（6～9 型式頃）Ⅲ期 14 世紀後葉～15 世紀後葉（10～11 型式頃）Ⅳ期 16 世紀初頭～（大窯Ⅰ期～）である。この遺跡で、遺構の時期のわかったものは少なく出土した遺物の多くが小片、細片で、他時代のものが同層で見られる状況であり、主となる遺物の量から中世と判明している遺構がほとんどであった。ここでは各期の様相について述べる。

Ⅰ期

Ⅰ期は 12 世紀後葉～13 世紀前葉の時期である。この時期は包含層や遺構でも混入遺物などに、遺物の出土が見られ、明確な遺構からの出土は見られなかった時期である。遺物は山茶碗などが中心であり、SX2 からの出土が多い。SX2 は非常に長い時代の遺物を包含している遺構であり、古式土師器から大窯期以降の遺物まで出土している。これは本来そこにあった遺構を壊して立地している事が原因である。ただ中世の遺物がこの時期から出土している事は、その時期の遺構が本遺跡で存在していた証であると言える。

Ⅱ期

Ⅱ期は 13 世紀後葉～14 世紀中葉頃（6～9 型式頃）の時期である。この時期の遺構は主として溝が多く、SD6、SD6-b や SK6 などの小規模の遺構からの遺物の出土が目立つ。SX2 や SD7 から出土しているものの、この時期の遺構を立地するに当たって壊した事から来る混入であろう。その事から大部分のこの時期の遺構は SX2 に壊されているため、目立った動きは読みとるのが難しい。

Ⅲ期

Ⅲ期は SK67、SK68 や、その周辺で見られた土坑、SD8、11 といった溝などがこの時期にあたる。SK67 は山茶碗類の椀、小皿とともに、大量に土師器皿が廃棄されていた土坑であり、時期は生田窯段階、11 型式 15 世紀後葉の遺構である。また SK68 などからも同様の遺物が見られ、建物群などは見られていないものの、屋敷的な存在が周辺に存在している可能性が伺える検出であると言える。

Ⅳ期

Ⅳ期の主たる遺構はⅢ期の SK67 を切って立地している SX2 や SD7 などの方形区画溝や、これらと同じ軸方位に配置する小型方形区画溝 SD9、さらに小規模区画溝の後に現れ、SX2 や SD7 を意識して建物を配置している掘立柱建物 SB1 や同規模の SB2、大型土坑 SK77 である。遺構の配置は SX2 や SD7 の方形大区画の内側、調査区南側を中心に遺構は分布し、現在の岩倉街道とほぼ軸を同じにしたものが大半を占めるものであった。

まとめ

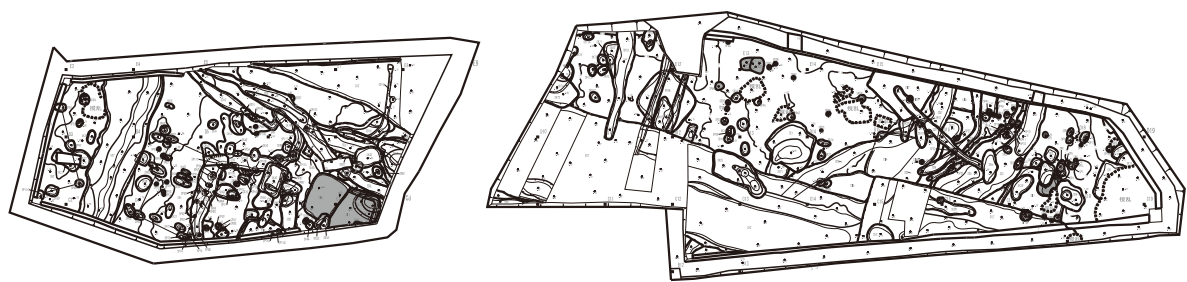
各期の遺構の動態について概観したが、古墳時代の遺構については、堅穴建物などが見られ、その結果、遺構の立地などから調査区南側に集落の中心が存在する可能性がある。時期は廻間Ⅰ～Ⅲ式頃が中心であった。西出古墳の時期と同じ頃の中古墳時代の遺構は、少ないものの若干見られる事が判明した。

古代（飛鳥～平安時代末葉頃）の遺構は特に飛鳥時代（7世紀後葉～8世紀初頭頃）の遺構が中心であり、堅穴建物と井戸、廃棄土坑がセットとなって立地している事が判明した。遺構の検出状況から、堅穴建物2軒に井戸1基、廃棄土坑1カ所ほどの組み合わせが考えられる。

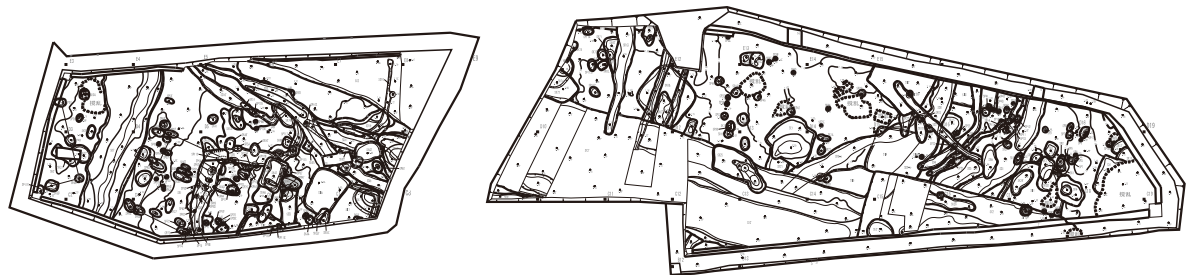
中世に至っては、大きく分けて4時期が見られるようである。特に最終期のⅣ期は、方形の大区画溝を中心に、方形小区画、掘立柱建物などを配する屋敷を連想させる構造が見られた。岩倉市周辺で同時代の遺跡である一宮市の元屋敷遺跡でも、大区画内に小区画を配する組み合わせが見られている。これら中街道遺跡との類似点から、当時の屋敷地としての一つの「かたち」であると言えるのかもしれない。

また、遺跡のすぐ横を走る岩倉街道との関係であるが、先述した通り、現在の岩倉街道と軸方位が近似する点は、非常に興味深いものである。

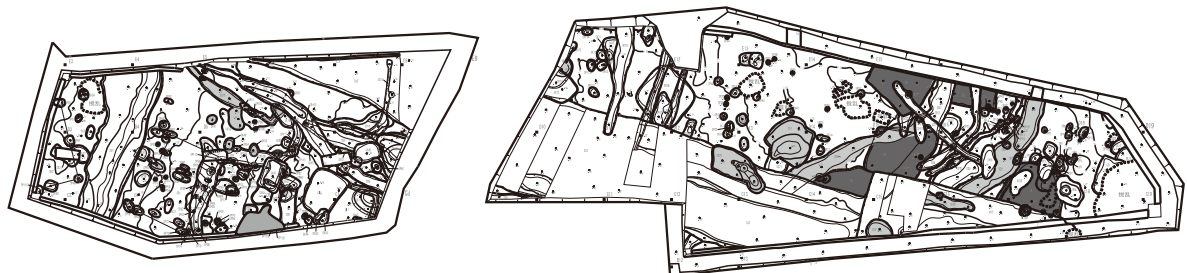
岩倉街道の開通時期は諸説提示されているが、はっきりとは解っていない。多くの説は清洲から名古屋へ城が移った1610年を契機として、それ以降に整備されたと言われており、少なくとも寛文年間（1661～1672）には整備されていたとされている（江南市教育委員会 2001）。また岩倉市以南と以北では別に整備されたものであるという説もある（西春町教育委員会 1994）。それによると、伝承と云う前提ではあるが、岩倉以南は小牧山北の岩崎山より、切石を枇杷島へ搬出するに当たって新設された街道であり、平田寺文書によると寛文5年～7年の頃の開通であったと言われている。今回の地点が新設道部分である場合、SX2、SD7との時期的な関連性は、出土遺物の下限である連房期の遺物で17世紀代となり、街道が開通した時期と符号するものと言える。街道沿いのこの建物の性格は、特徴的な遺物の出土を見ていないため不明と言わなければならないが、ただそれ以前から、中世の集落の存在を臭わす痕跡、例えば14世紀～15世紀代にかけての遺構である、SK67などのかわらけ溜まりや溝などの存在から、中街道遺跡は単時期の一過性なものではなく、連綿と続く集落の一端として捉える必要性が見られる。そのことから岩倉市内に存在していて、時期的にも合う井上荘との関係も視野に入れて、その関係を整理したいところではある。しかし岩倉市内の発掘調査事例の少なさから、ここではあえて論は述べず、今後は市内での遺跡調査の資料増加に期待しつつ、合わせて詳細な地方文書調査、文書批判を行い、総合的に判断を下すのが今後の課題であろうと考える。



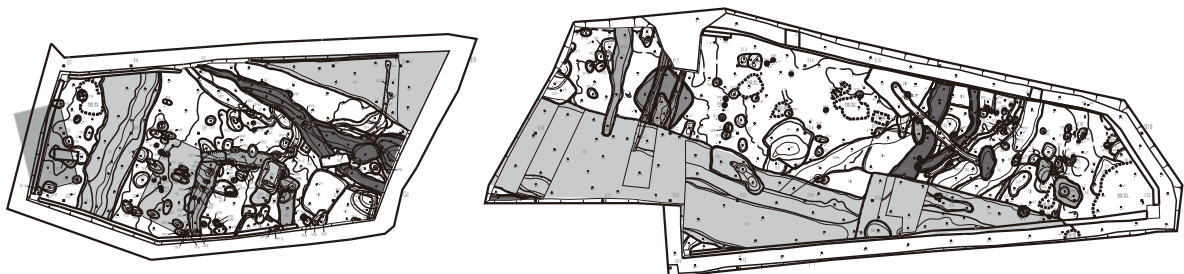
弥生時代終末期～古墳時代初頭（廻間Ⅰ式～廻間Ⅲ式頃）



古墳時代中後期



古代（飛鳥時代～11世紀）



中近世（12世紀後葉～）

■ Ⅲ期
■ Ⅳ期

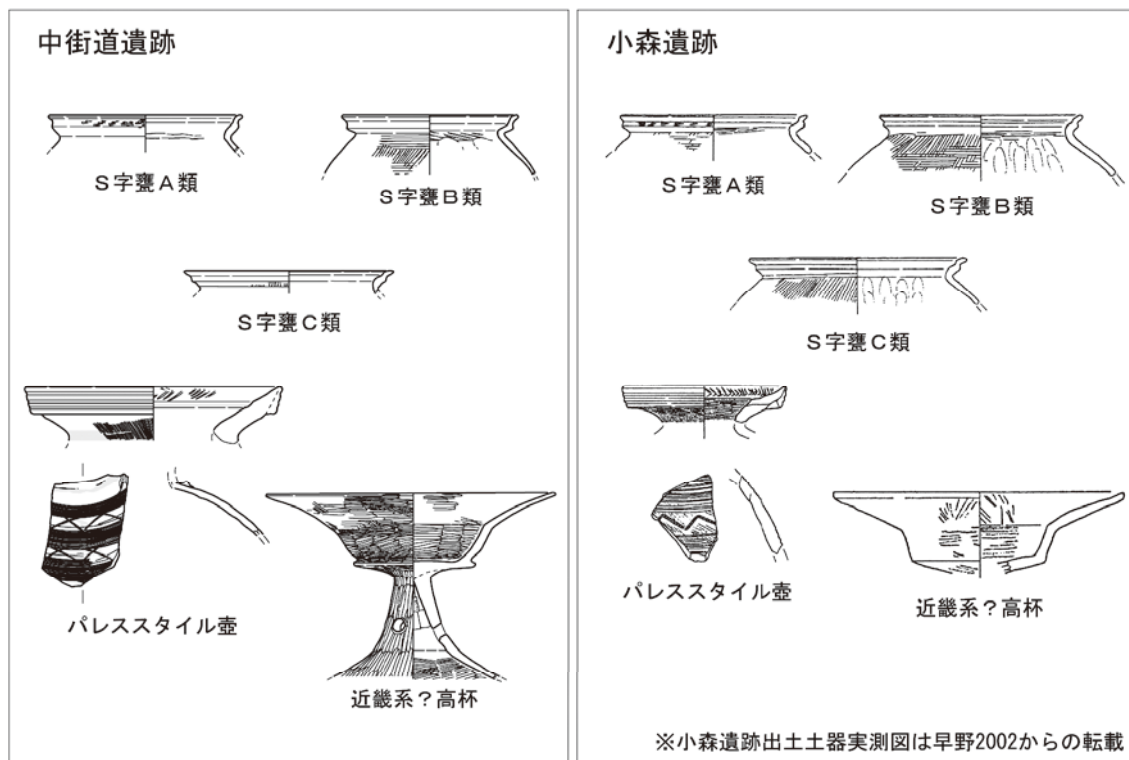
第1図 時代別遺構の動態状況図

(2) 中街道遺跡出土の古墳時代前期の土器について

中街道遺跡の下層調査中、花ノ木遺跡ではほとんど見られなかった古墳時代の土器（土師器・須恵器）が少なからず出土した。これは、中街道遺跡の位置が、花ノ木遺跡よりも小森遺跡（古墳時代前期）や西出古墳（古墳時代中期）、神宮寺古墳（古墳時代後期）といった古墳時代の遺跡に近いためであろう。事実、中街道遺跡の中でも、特に既知の古墳時代遺跡に近い調査区西側に該期の遺物が多い傾向が認められた。今回の調査では、ほとんどの遺構覆土に古代～中世の遺物が多数混在しており、明確な古墳時代の遺構はなかなか見出せなかったが、少なくとも中街道遺跡の調査区西側の近くに古墳時代の生活域があったものと思われる。

中街道遺跡から出土した古墳時代の土器を見ると、前期中葉以前に位置づけられる古式土師器がほとんどである。弥生時代終末期または古墳時代初頭とされるものを含めて土器編年で言えば、廻間Ⅰ式～廻間Ⅲ式にあたる。古墳時代中期～終末期の須恵器が遺構から出土する例もなかったわけではないが、中街道遺跡ではそれ以上に前期中葉以前の古式土師器の存在が目立った。これは、廻間Ⅰ式～廻間Ⅲ式の土器が数多く出土した岩倉市南端の小森遺跡（早野 2002）の状況に近い。具体的には、A～C 類の S 字甕やパレススタイル壺、高杯（近畿系？）等が挙げられる。

第 2 図は中街道遺跡と小森遺跡の主な古式土師器を示したものであるが、これを見ると両者の共通性がよく分かる。中街道遺跡と小森遺跡は 1km も離れておらず、古墳時代前期において二遺跡の間には何らかの関係があったものと考えられる。



第 2 図 中街道遺跡と小森遺跡の主な古式土師器 ※弥生時代終末期含む (1:6)

五条川中流域には、中街道遺跡・小森遺跡以外にも、岩倉城遺跡、権現山遺跡、北島白山遺跡、三ツ井遺跡、元屋敷遺跡といった古墳時代前期の遺跡が多数展開していることが知られている。小森遺跡出土遺物の再整理を通じてこれらの遺跡を分析した早野浩二氏は、「五条川によって形成された木曽川系自然堤防帯には、山中式後期以降、比較的等質な中小規模の集落が顕在化」するとし、「弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、特定のある時期に集落が加速度的に進行した形跡は認められず、流域一帯においては小規模な集落移動が繰り返される安定的な社会が志向された」と推定している（早野 2002）。中街道遺跡から出土した古墳時代前期の土器も、そのような中で残されたものであろう。

今回の調査で新たな情報が加わり、五条川中流域の空白域がまた一つ埋まることになった。分布論・遺構論等さらなる議論を大きく展開できるほどではないが、中街道遺跡下層調査における重要な成果の一つと言えよう。

以上、雑駁ではあるが、調査区西側を中心とする中街道遺跡下層の特徴として、古墳時代前期中葉以前の土器のまとまりを強調しておきたい。

(3) 中街道遺跡における祭祀行為の可能性について

中街道遺跡の下層調査では、特に調査区東側から祭祀行為と関係する可能性のある遺物がいくつか見つっている。それらは古墳時代終末期～古代の範疇におさまるものと考えられ、該期の中街道遺跡の特徴と考えられる（第3図参照）。

具体的に述べると、まず挙げられるのは、溝 SD6 から出土した陶馬である。SD6 の覆土中には古墳時代～中世の遺物が多数混在しており詳細な時期は不明であるが、陶馬の特徴や近くから出土した須恵器片等を勘案すれば古墳時代終末期（飛鳥時代）～古代（奈良時代）の範疇に位置づけられよう。土馬・陶馬の類は、破碎された状態で出土することが多いが（水野 1983）、中街道遺跡の陶馬もその例に漏れなかった。今回出土したのは裸馬の首から胴にかけての破片であり、頭・四肢・尾は残っていなかったのである。これは、中街道遺跡における陶馬の使用法が、同時期の他地域と同じであったことを示しているものと考えられ、全国的な祭祀儀礼の普及をうかがわせる。

次いで挙げられるのは、井戸 SE1 の底部から出土した斎串である。同一遺構から出土した須恵器の特徴から7世紀代のものと見られ、愛知県内の遺跡から出土した斎串の中でも特に古い部類に位置づけられる。斎串を用いた祭祀は古墳時代後期（6世紀）に始まるとされ、奈良県域では井戸からの出土例もこの頃から見られると言う（山崎 2005）。愛知県内では、名古屋市志賀公園遺跡で7世紀後半～末の斎串が多数見つかり、少なくとも7世紀後半の尾張において斎串を用いた祭祀が普及していたことが知られる（愛知県埋蔵文化財センター 2004）。そして岩倉市域においても、7世紀には同様の祭祀行為がおこなわれていたようである。

なお斎串のすぐ横で、紡織具の杵の一部が出土しており、これも井戸祭祀と関わっている可能性がある。古墳時代中期に主体化し律令国家成立期に増加する「柄組式（差込式）」（鈴木 2013）の一例（Y型腕木：東村 2011）が出土したことも重要だが、それだけでなく斎串との共伴状況も評価したい。

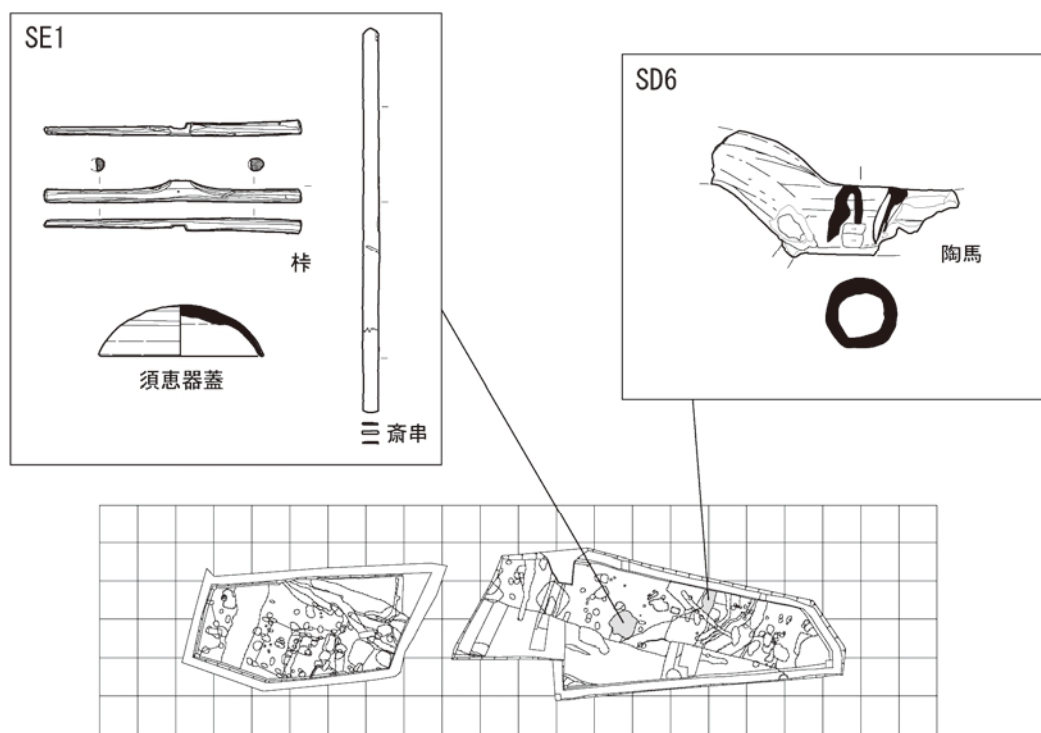
そう考えると、同じく斎串・杵のそばで見つかった須恵器蓋等も、一緒に井戸祭祀に用いられた可能

性がある。

さて、上記の遺物を見ると、それぞれ意味合いは異なるものの、何らかの形で水との関わりが想起されることが指摘できる。SD6 から出土した陶馬は（行疫神に関係するという説もあるが）主に水神信仰による祈雨または止雨の道具と考えられているし（水野 1983、金子 1988）、SE1 から出土した斎串や栳、須恵器蓋等は井戸祭祀の道具であった可能性がある。中街道遺跡は、調査中も湧水が絶えない所であったが、古墳時代終末期～古代の該地においては天・地の水（水神）に対して祭祀をおこなう必要があったのだろうか。少なくとも、当時の中街道の地に住んでいた人々にとって、水が重要な存在であったという印象を受ける。古墳時代前期や中世の遺物には、水に関わる可能性の高い祭祀遺物が特に見られなかったことから、古墳時代終末期～古代における本遺跡の特徴として、（あくまでも可能性であるが）一種の「水祭祀」という性格を指摘しておきたい。

ところで、中街道遺跡よりも調査中の湧水が多かった花ノ木遺跡では、このような水祭祀を連想させる遺物は見つからなかった。両遺跡の違いといえば、立地・時期・性格等が挙げられる。これらのうち、何が祭祀関連遺物（可能性のあるものを含む）の有無につながったのかは断定できないが（少なくとも古墳時代終末期～古代に属する遺構・遺物は中街道遺跡の方が多い）、中街道遺跡と花ノ木遺跡の大きな違いの一つと言えよう。

中街道遺跡下層の主に西側は古墳時代前期の土器のまとまりが特徴的であったが、東側は古墳時代終末期～古代の祭祀的性格が特徴的であった。



※全体略図の縮尺は1:1000、遺物実測図の縮尺は須恵器蓋・陶馬1:6、斎串・栳1:12

第3図 中街道遺跡から出土した祭祀関連遺物（可能性のあるもの含む）

引用・参考文献

- 愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』
愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1992『岩倉城遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1994『松河戸遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2003『権現山遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2004『志賀公園遺跡Ⅱ』
愛知県埋蔵文化財センター 2011『御山寺遺跡』
愛知県史編纂委員会 2011『愛知県史 資料編 4 飛鳥～平安』
愛知県史編纂委員会 2012『愛知県史 別編 窯業 3 中世、近世 常滑系』
岩倉市国衙遺跡試掘調査委員会 1979『岩倉市国衙遺跡試掘調査概要報告書』
岩倉市教育委員会 1983『御土井廃寺、西出古墳』
岩倉市史編集委員会 1985『岩倉市史 上巻』
岩倉市教育委員会 1991『薬師堂廃寺遺跡発掘調査概報』
岩倉市教育委員会 1992『野辺遺跡発掘調査概報 八剣遺跡発掘調査概報』
岩倉市文化財審査委員会 1995『岩倉市文化財審査報告書』岩倉市
一宮市教育委員会 2000『元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
一宮市 1974『一宮市史 資料編 4』
宇野隆夫 1989「井戸考」『古代と中世の歴史と社会』真陽社
恵那市教育委員会 1983『正家 1 号窯発掘調査報告書』
可児町教育委員会 1975『谷迫間古窯址発掘調査報告書』
可児町教育委員会 1978『谷迫間 2 号古窯発掘調査報告書』
金子裕之 1988『律令期祭祀遺物集成』
かみつけの里博物館 2000『鍋について考える』
江南市教育委員会 2001『江南市史 本文編』
斉藤孝正 1982「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊考古学ジャーナルNo. 211』ニューサイエンス社
柴垣勇夫 2003『東海地域における古代中世窯業生産史の研究』真陽社
柴垣勇夫、中野晴久 2012「編年表 常滑窯製品編年」『愛知県史 別編 窯業 3 中世、近世 常滑系』
鈴木敏則 2013「木製紡織具の画期と背景—東海の事例から—」『紡織の考古学 資料集』山梨考古学会
鈴木正貴 2005「第 2 名古屋城三の丸遺跡の土師器皿の変遷」『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』
(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 2006「尾張における遺構年代決定の問題」『守護所と戦国城下町』高志書院
鈴木正貴 2011「小牧山城とその城下町の土師器」『研究紀要第 12 号』愛知県埋蔵文化財センター
瀬戸市史編纂委員会 1989『瀬戸市史 陶磁史編 一』
瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』
瀬戸市教育委員会 1992『上之山』
瀬戸市教育委員会 1994『下半田川 C 窯跡Ⅰ』
瀬戸市教育委員会 1995『暁窯跡』
瀬戸市教育委員会 2002『小長曾陶器窯跡』
瀬戸市教育委員会 2009『紺屋田 A 窯跡』
田口昭二 1982「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル No. 211』ニューサイエンス社

- 武部真木 2006「山茶碗の用途をめぐって－摩滅痕からの用途をめぐって－」『研究紀要 第7号』
愛知県埋蔵文化財センター
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 XV』
- 多治見市教育委員会 1970『平尾遺跡 虎溪山遺跡』
- 多治見市教育委員会 1973『明和1号窯発掘調査概報』
- 多治見市教育委員会 1983『大畑大洞古窯跡群（脇之島2号窯）発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1984『北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1985『赤坂1号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1987『一般国道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1989『犬藪迫間洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1989『白土原1・2・3号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1990『虎溪山4・5号窯発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1990『明和古窯跡群発掘調査報告書』
- 多治見市教育委員会 1993『美濃窯の焼物』
- 多治見市教育委員会 1993『小名田小滝古窯跡群』
- 多治見市教育委員会 1994『白土原11.12.13 窯発掘調査報告書』
- 東海考古学フォーラム第4回尾張大会 1996『鍋と甕 そのデザイン』
- 東海考古学フォーラム第7回三重大会 1999『S字甕を考える』
- 東海市教育委員会 1998『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』
- 東海市教育委員会 2013『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』
- 常滑市教育委員会 1974『柴山古窯址群』
- 常滑市教育委員会 1988『上白田古窯址群』
- 東京国立博物館 1994『特別展 中国の陶磁』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1984『奈良・平安の中国陶磁』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 編 1993『貿易陶磁－奈良・平安の中国陶磁－』
- 植崎彰一 1961「土器の発達」『世界考古学大系4』平凡社
- 西春町教育委員会 1994『西春と岩倉街道』
- 早野浩二 2002「愛知県岩倉市小森遺跡の再評価－他地域系土器からみた地域間交流の問題を中心に－」
『考古学フォーラム15』
- 東村純子 2011『考古学から見た古代日本の紡織』六一書房
- 藤澤良祐 1978「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁8』東洋陶磁学会
- 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1995「古瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要3』
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1991「古瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要X』
瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1995「古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 藤澤良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要5』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 水野正好 1983「馬・馬・馬－その語りの考古学」『文化財学報第2集』奈良大学文学部文化財学科
- 山下峰司 1995「灰釉陶器と山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山崎孝盛 2005「古墳時代の井戸祭祀に関する一考察 奈良の井戸を題材として」
『岡山大学大学院文化科学研究科紀要第20号』



花ノ木遺跡全景 (西から)



花ノ木遺跡垂直写真 (上が北)

図版 2



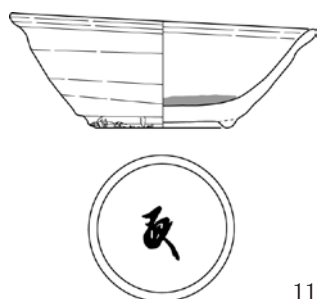
SD4 遺物出土状況
SK4 しがらみ出土状況
(南から)



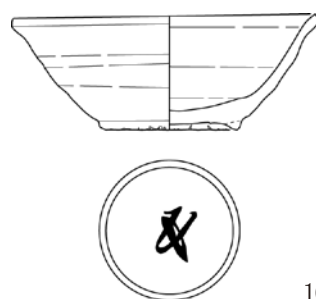
SD4 遺物出土状況近景
(東から)



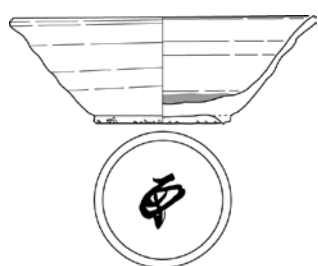
SD4 遺物出土状況近景
(南から)



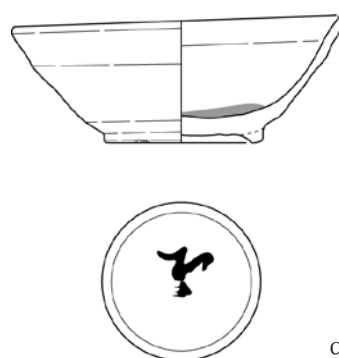
11



10



12



9

花ノ木遺跡 SD4 出土遺物墨書赤外線写真

図版 4



SD6 遺物出土状況
(北西から)



SD6 遺物出土状況近景
(北西から)



SD6 遺物出土状況近景
(北東から)



SD6 土層断面 (北西から)



SK4、SD4、SD5 完掘
(北から)



SD6、SD7 完掘 (西から)

図版 6



花ノ木遺跡 SD4 出土遺物



花ノ木遺跡 SD6 出土遺物



中街道遺跡 上層垂直写真 (上が北)



中街道遺跡 下層垂直写真 (上が北)

図版 8



中街道遺跡 東側全景 (北東から)



中街道遺跡 東側全景 (南東から)



中街道遺跡 西側全景 (北西から)



中街道遺跡 西側全景 (北東から)

図版 10



SI1 完掘 (北から)



SI2 完掘 (西から)



SI3 完掘 (西から)



SI4 完掘 (西から)



SI6 完掘 (南西から)



SI6 竈完掘 (南西から)



SI7.8 完掘 (南から)



SI8 掘方内遺物出土状況 (北から)



SE1 完掘 (西から)



SE1 遺物出土状況 (北から)



SD6 陶馬出土状況 (東から)



SK67 遺物出土状況 (南から)

図版 12



SX2 西側全景 (西から)



SX2, SD7 全景 (西から)



SD7 遺物出土状況 (東から)



中街道遺跡 竪穴建物 (SI) 出土遺物



SX2・SD7 出土遺物

図版 14



中街道遺跡 SK67 出土遺物



中街道遺跡 SE1・SE2 出土遺物と SD6 出土陶馬

報告書抄録

ふりがな	はなのきいせき、なかかいどういせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	花ノ木遺跡・中街道遺跡発掘調査報告書
副題	都市計画道路北島藤島線街路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
編著者名	山内宏之(岩倉市教育委員会)、新宅輝久、松永篤知、高野裕二(株式会社アーキジオ東海)
編集機関	岩倉市教育委員会 株式会社 アーキジオ東海 文化財調査課
編集機関所在地	〒482-8686 愛知県岩倉市栄町一丁目66番地 TEL 0587-38-5819
発行機関	〒491-0827 愛知県一宮市5-14-2-A TEL 0586-64-5873
発行年月日	西暦2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
はなのき 花ノ木 なかかいどう 中街道	あいちけんいわくらし 愛知県岩倉市 そのちよう 曾野町 しもかいどうすみだ 下街道、隅田、 はなのきちない 花ノ木地内		23228	110053 110054	35度 59分 35秒	136度 52分 37秒 ・ 136度 52分 31秒	20120820 ～ 20130225	1,778 m ²	都市計画道路北島藤 島線街路改良工事に 伴う埋蔵文化財発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
はなのき 花ノ木	散布地	古墳時代 後期 ～ 中世	土坑 pit 溝	須恵器・灰釉陶器 山茶碗類・白磁			花ノ木遺跡では、山茶碗の高台裏に花押が墨書 されたものが見られた。 中街道遺跡では、飛鳥時代の斎串や棹などが井 戸より出土し、中近世では、17世紀代まで存続 していた区画溝や掘立柱建物、11型式の山茶碗 類と土師器皿が大量に廃棄された形で出土し た土坑などを確認した。		
なかかいどう 中街道	散布地	古墳時代 前期 ～ 江戸 時代前期	竪穴建物 掘立柱建物 土坑 pit 溝	古式土師器・須恵器 灰釉陶器・山茶碗類 土師器・青磁					
要 約	花ノ木遺跡では、12世紀後半(4型式頃)や13世紀前半(5型式頃)の屋敷などを区画していたと考えられる溝を検出した。特に、13世紀代の山茶碗の高台裏には花押が墨書され、当時の当地の状況を知る格好の資料であった。 中街道遺跡は古墳時代初頭～近世までの遺構と遺物が見られる複合遺跡であり、古墳時代のものは2時期見られ、遺構は、古墳時代初頭頃の竪穴建物や土坑と古墳時代後期(飛鳥時代)の竪穴建物や井戸、土坑などを検出した。これらの時代の中で井戸底面からは斎串、棹が出土し、その出土状況から祭祀が行われた痕跡と考えられる。古代末～近世の遺構は、掘立柱建物や区画溝、土坑などがあり、古代末の土坑などからは灰釉陶器(H-72型式段階)の椀Aや深椀などが完形に近い形で出土している。近世では幅5mほどの巨大な区画溝が見られた。ほかの溝は中世が主であり、7～8型式の山茶碗類が目立って出土し、陶馬なども見られた。ほかには11型式の生田窯段階の山茶碗類と土師器皿が混在する廃棄土坑なども見られた。								

花ノ木遺跡・中街道遺跡発掘調査報告書

－ 都市計画道路北島藤島線街路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 －

平成25年3月27日 印刷

平成25年3月29日 発行

編集・発行 岩倉市教育部生涯学習課
〒482-8686 愛知県岩倉市栄町1丁目66番地
株式会社 アーキジオ東海
〒491-0827 愛知県一宮市5-14-2-A

印刷・製本 株式会社 トーザワ
〒933-0826 富山県高岡市佐野1386-1